

2021年12月12日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ルカ福音書2章1～7節

説教題：家畜小屋での誕生

10月に虫垂炎になって二十数年ぶりに手術というものを受けました。実はある牧師の本に、その先生が手術を受ける時、「麻酔の前に少し時間をもらって、手術のため、執刀する先生のため、お世話する看護師の方々のために祈った」ということが書いてあるのを読んでいた。それで私も、手術室に入った時、「少し祈らせて下さい」と言おうかと思ったのですが、とにかく腹部が痛くて、その余裕もなく、声に出して祈ることはできませんでした。しかし事前の説明で「もしかしたら大きな手術になるかも知れません」ということは聞いていましたので、そうならないようにと心の中で神様に祈りました。「手術室にも神様は共に入って来て下さった、神はここにもいて下さり、最善に守って下さる」、そのことは思うことができ本当に平安でした。因みに、麻酔のスゴイことに驚きました。「麻酔をかけます」という言葉を聞いた瞬間には、もう意識がなく、次に聞いた言葉は「手術が終わりました」でした。いずれにしても、どこにでも神様がいて下さる、神様と繋がっていることができる、それは本当に感謝なことだと改めて思いました。その恵みを私達に与えるために、神の子イエス様は、人として生まれて下さいました。

今日の箇所は、イエス様の誕生の出来事を記す箇所です。初めに内容を短く確認して、その後、この箇所のメッセージを考えます。

## 1. 内容～イエスは歴史の中に生まれた

1～2節に「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった」(1～2)とあります。皇帝アウグストは、帝政になったローマの最初の皇帝で、その長い在位期間に、ローマ帝国各地では住民登録が行われたようです。その皇帝の権威を背景にローマ帝国の各地でそれぞれに行われた住民登録を、ルカは「『全世界の住民登録をせよ』という勅令」と表現したようです。さらに、ルカは「クレニオがシリアの総督であったとき」と書きます。クレニオという人は、ユダヤをその中に含むシリア州で軍事行動を起こして、権力を掌握したことがありました。その時にも住民登録が行われました。2節の「住民登録」というのは、その時の住民登録だと考えられます。

当時の住民登録の命令は、それぞれ自分の本籍地に帰って登録をする、そのような命令だったようです。ヨセフは、偉大な王であったダビデの家系に属していましたので、その本籍地は、ダビデが生まれた町であり、またバビロン捕囚からユダヤ人達が帰還した時、ダビデの家系の者が多く住むようになったベツレヘムだったのだと思います。ある人は、ヨセフはそこに自分の土地を持っていたのではないかと、言います。それは分かりませんが、もし、そうだとすると、その住民登録は、人頭税と固定資産税を納めさせられるためのものであったこととなります。

いずれにしても、自分達が生活していたナザレの村から150kmの距離、3日の道のりのベツレヘムに、ヨセフは身重のマリヤを連れて出かけました。マリヤにとっては、大変な旅だったと思います。何とかベツレヘムに着いたのですが、そこでマリヤは出産することになります。しかし「宿屋には彼らのいる場所がなかった」(7)とあります。当時のベツレヘムに旅人の宿泊施設がどの程度あったのか、分かりません。もしかしたら、住民登録のために、既に大勢の人々がベツレヘムに来ていて、それで彼らの滞在する場所がなかったのかも知れません。それで2人は、家畜小屋に滞在することになったようです。ある学者は「洞窟のような所だっただろう」と言います。ある学者は「人の住居スペースに家畜小屋がくっついているような場所だったのではないかと」言います。「マリヤ」という映画があります。その映画の中では、今にも子供が生まれそうなマリヤを心配して、ヨセフが必死になって滞在場所を探して訪ね歩く場面が描かれていました。いずれにしても、子供を産むには、あまりに

も辛い、お粗末な場所で、マリヤは男の子を産むのです。しかも「それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた」(7)という表現は、「マリヤ自身がそれをなした」というニュアンスで書いてあります。恐らく、お産を手伝ってくれる人もいなかったのではないのでしょうか。そんな状況でイエス様は、お生まれになったのです。これが、私達の主、神の子イエス・キリストの誕生の様子なのです。

ルカは、ここから何を伝えようとしているのでしょうか。それは何より、イエス様の誕生は、歴史の中に起こった歴史的事実であったということではないのでしょうか。お伽噺は「昔々、あるところに」です。しかし、イエス様の誕生は違います。時代も場所もはっきりしています。歴史的事実なのです。そしてそれは、誕生の時がそうであったように、イエス様の生涯も、そして十字架も歴史の中で起こったことなのです。さらに、復活も歴史の中で起こったことなのです。

昔からこんなことが言われて来たそうです。「昔、枝が2つに分かれた大きな木があった。一方の枝は、生まれたばかりのイエス様を寝かせるための飼葉桶になった。そしてもう一方の枝は、イエス様の十字架になった」。もちろん寓話でしょう。しかしこの話は「イエス様が飼葉桶に寝かされたということと、イエス様が十字架にお架かりになった、という出来事が、一つながりのことなのだ」ということを表そうとしています。つまりイエス様の出来事は、誕生から、十字架、そして復活まで、すべてが繋がっていて、歴史の中で起こったことなのです。神の御子が、赤子となり、人となって人の世に確かに生まれて下さったのです。人間の歴史の中に、神が入って来て下さったのです。神の世界と人間の世界が結ばれたのです。それがクリスマスです。

## 2. メッセージ

この箇所は、私達にどのようなメッセージを語るのでしょうか。

### 1) 神の御心は成る

1番目は、神の御心は成るということです。イエスがベツレヘムでお生まれになったのは、マリヤがヨセフと一緒にベツレヘムに行ったからです。しかしある学者は、登録だけならマリヤは行く必要がなかったのではないかと、言います。それは、実際どうだったのか、分かりません。しかし、もしそうなら、なぜマリヤは、ベツレヘムに行ったのでしょうか。マリヤの懐妊については、聖霊によって身ごもったということ、ヨセフも疑って、悩み、苦しんだくらいですから、ナザレの村でも、マリヤに対する様々な噂話や誹謗中傷がなされ、誹謗中傷がなされていたはずなのです。ヨセフは、それが分かっていたから、マリヤを1人、村に残しておくことを避けて、一緒に連れて行ったのだらうと思います。

また、そもそも、なぜヨセフがベツレヘムに行かなければならなかったかということ、ローマ皇帝の権威を背景に「住民登録をするように」という命令が出されたからです。ローマの権力者も、そしてヨセフ達さえも、自分達の行動がどのような結果につながるか、分からなかったと思うのです。しかし、聖書はこう言っています。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである」(ミカ 5:2)。世界を治める本当の支配者(王)がベツレヘムから出る、ベツレヘムに生まれる、と預言するのです。つまり、それが神の計画だったのです。そして神様は、色々な人を用いて、ご自身の御心をなして行かれるのです。ローマ皇帝さえ、神の御心が成るために用いられた器に過ぎないのです。私は「神の御心は成る」ということを確認したいのです。

ところで、イエス様の誕生に込められた神の最も重大な御心とは何でしょうか。それは、神が、イエス様を救い主と信じる全ての人を滅びから救い、天の御国に迎えて下さる、ということです。

イエス様のお誕生が、あまりに辛い、悲しい状況であったということをお知らせしました。神の子ですから、神がそのつもりになられたら、どんな境遇に生まれさせることもおできになったはずですが。王侯貴族の家にでも、大商人の家にでも、どうにでもなったはずですが。それにもかかわらず、あまりにも貧しい境遇でのお誕生でした。しかし、そこに神様のメッセージがあるのです。神の子であるイ

イエスが家畜小屋で生まれ、飼葉桶に寝かされたのは、「どんな小さな者、弱い者、貧しい者でも、あるいは苦しんでいる者でも、イエスは共にいて下さる、決して見捨てられない、必ず救われる」という神様の御心の表れだったのではないのでしょうか。そのために、ここに生まれたイエス様は、人々の苦しみと共に生きて、そして最後は十字架に架かって、私達の救いを為し遂げて下さいました。そんなイエス様だから、その救いのメッセージは、どんな境遇にある人の心にも届くのです。そのイエス様の十字架の救いでカバーできない人は、1人もいないのです。それが、神の御心であり、その神の御心は成るのです。

拉致被害者の横田めぐみさんのお父様の滋さんという方がおられます。昨年6月に召天されましたが…。「百万人の福音」の11月号に奥様の横田早紀江さんのお証しがありました。先日もう少しご紹介しましたが…。めぐみさんが突然いなくなって、ご夫妻は、どんなに苦しまれたことだろうと思います。その大きな苦難の中で、早紀江さんが先に救われなさいました。そして、早紀江さんの回りに「祈る会」ができて行ったようですが、滋さんは「物語のような聖書の話など信じられない。祈っても何も変わらないじゃないか」と言われ、信仰を持つことを拒否されていたそうです。別の証しには「一番辛いのはめぐみななのだから、自分達だけが心救われるわけには行かない」と言っておられたともありました。しかしその滋さんが、「希望は神にある」と言って信仰を持たれたのです。「神がこの時を選んで与えて下さいました。感謝です」と言われたそうです。ご夫妻の苦しみは、私などには分かりません。しかし馬小屋で、貧しさと、悲しみの中に生まれたイエス様、十字架で苦しまれたイエス様は、確かに苦しみの中におられたご夫妻を救われたのです。イエス様は、どんなに苦しい思いを生きている方をも救うことができになる、生きる現実の中で救うことができになる、そんなことを思わされます。神の救いの御心は成るのです。

そして「神の御心は成る」と申し上げましたが、この誰も見向きもしないような最低のところに生まれて下さったイエス様を、今、23億人の人が「私の主、私の王」として礼拝しているのです。当時の権力者は、皇帝アウグストも、どんなに大きな権力を持っていたとしても、歴史の中に埋もれて行きました。しかしイエス様は違います。私はそのことを思う時、神様に、イエス様に、委ねた人生こそ、一番確かな人生ではないかと、そんなことも思わされます。私達を救うために生まれて下さったイエス様、このイエス様を信じ、委ねて行くところに、何があっても失われない希望を見て生きる道があります。

## 2) 主イエスを迎える

この個所の2つのためのメッセージは、イエス様を心にお迎えするということです。2章7節に「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」という言葉があります。ベツレヘムにはイエス様の家族が泊まる場所がなかった。だからイエス様は洞窟のような家畜小屋でお生まれにならなければなりません。しかし、それはある意味でイエス様の生涯を象徴していたとも言えます。イエス様は、当時の社会の中で居場所のないような人々のために生きられたからです。生きて行くための希望を必要としている人に近づいて行かれ、神の愛と赦しを教え、彼らと共に生きようとされたのです。イエス様のご生涯、それは神が人となられ、人を支配するのではなく、人のために生き、人のために命まで差し出されるご生涯でした。

しかし、それにしても、ベツレヘムには本当にイエス様の家族が泊まる部屋はなかったのでしょうか。誰かがその気になれば、1つの家族が泊まれるぐらいの余裕はどこかにあったのではないのでしょうか。しかし結局、誰もそれを提供しなかったのです。誰かが提供した家畜小屋が当時の人々が示した最大の親切だったのです。もし私達が2000年前生きていたら、そしてベツレヘムに住んでいたら、どうだったでしょうか。

私達は、イエス様の誕生によって、大きな、大きな祝福を頂きました。こんな自分の罪が全部赦され、神の子とされる、さらに永遠の滅びから救われ、天国に引き上げられるという祝福です。その恵

みがあまりに大きすぎて、実感がないほどの祝福です。そんな祝福を頂いた私達です。何か、神様の恵みに応えて、今からでも、イエス様のためにスペースを開けるようなことができると、良いなと思うのです。

最初に、虫垂炎で入院した話をしましたが、私のその前の入院は、急性鬱症での入院でした。ちょうどクリスマスの時期でしたが、私は心を病んで、ラジオから聞こえてくるクリスマスの賑わいが疎ましくさえありました。それでも何となく寂しいのです。そのためでしょうか、誰とも話をしないだろうと分かっている、食堂に行ってボーッとしていました。しかし心は叫んでいました。「誰でも良い、話し掛けてくれ」。その時、思ったのです。私だけでなく、世の中には「誰か話し掛けてくれたら嬉しいな」と思っている人がたくさんいるのではないだろうか。ある人は言ったそうです。「誰か1人でも、私のために祈ってくれたら、私は生きて行ける」。そういうことなら、私にもできるのではないかと、そう思いました。

「村の教会のクリスマス劇」という話があります。「宿屋の主人の子供の役」を特別に作ってもらった男の子がいました。彼のセリフは、「ダメだ、部屋はない!」でした。しかし彼は「ダメだ、部屋はない!」と言った後で、泣き出して「マリヤさん、ヨセフさん、馬小屋に行かないで。馬小屋は寒いから、イエス様が風邪を引いちゃうから馬小屋に行かないで」と叫んだという話です。劇は滅茶苦茶になりました。しかし、村の人々の心に忘れがたいものを残しました。男の子は、そうやって神の恵みに応えたのではないのでしょうか。「詩篇」の詩人も言いました。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか」(詩篇 116:12)。

このクリスマス、何でも良い、どんな小さなことでも良い、誰かと愛を分かち合うこと、あるいは、神様の恵みに応答するという形で、お祝いすることができると良いな、と思います。私は今「あなたがたは、自分に関する限り、全ての人と平和を保ちなさい」(ローマ 12:18)という御言葉に応答することを通して、神に感謝を捧げるように迫られています。皆さんは、どのような形で神に感謝を捧げられるでしょうか。